

日本科学者会議

福井支部 ニュース

第7号 2002年1月5日発行

- ** 日本科学者会議福井支部
- ** 〒910-8507 福井市文京3-9-1
- ** 福井大学工学部 小倉久和研究室 気付 Tel 0776-27-8582
- ** ogura@nqueen.fuis.fukui-u.ac.jp
- ** 郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部
- ** ホームページ <http://www.jsa.gr.jp/fukui/> (本部のページ <http://www.jsa.gr.jp/> からたどれます)

今号の内容

- 追悼：玉置伸悟先生の科学論（桜井康宏）
- 支部常任幹事会議事録(抄)，北陸地区会議議事録(抄)
- 会員の声：大学教員とパラダイムシフト（小寺忠）
- 寄稿：住んでみて感じたアメリカという国 その2 - 大学 - （永井二郎）

12月例会「妊娠・出産に纏わる先人たちの知恵」が開催されました

昨年12月11日，県立大学交流センターで福井支部の12月例会が開催され，福井県立大学看護福祉学部の大川洋子先生に「妊娠・出産に纏わる先人たちの知恵」のタイトルで講演頂きました。OHPやプロジェクトで多くの資料が紹介され，お産にかかわる各地の風習や習慣が，現在の知識でどのように意義付けられるか，詳しい説明がありました。現在の状況から見るとかなり劣悪な産屋の環境で行われていた産婦に対する扱いも，現代的な意味をもっていることも紹介されました。生殖医療技術は最先端科学技術としてめざましい発展をし続けていますが，古今東西，誕生のメカニズムは変わりなく，先人たちは生活の知恵をもっているのちの誕生に関わってきていることが納得できました。8人の参加でしたが活発な質疑がありました。

福井支部30周年記念講演会・シンポジウムを開催します

21世紀の地域構造と公共交通のありかた

日時 2002年3月16日(土) 13:30~16:50

会場 福井県国際交流会館 2階会議室

参加費 500円

シンポジスト決定！

コーディネータ 桜井康宏氏(福井大学工学部)

基調講演 川上洋司氏(福井大学工学部)

シンポジスト報告 浅沼美忠氏(福井県立大学経済学部)，内田桂嗣氏(ROBAの会会長)

川本義海氏(福井大学工学部)，美濃部雄人氏(福井県都市計画課課長)

参加券は支部幹事が扱います。あるいは，直接支部事務局へ，住所氏名を明記し切手を貼った返信封筒を同封して申し込んで下さい。地域・職場等での宣伝をお願いします。

お願い：2002年度会費未納の会員は至急納入下さい(昨年度約1/2の会員が未納)
過去の会費未納の会員は，分納でも結構ですので，滞納一掃にご協力下さい

前工学部長の玉置伸悟先生が2001年10月13日の午前5時3分に急逝された。高齢社会の中にあってはまさに「働き盛り」ともいえる62才の若さであった。30年前の1971年に相次いで福井大学に赴任し、同じ講座で教育や研究を共にし、死の5時間前まで酒を共にしながら議論し教えを受けてきた者として、その教えを引き継ぎ発展させるといふ観点から玉置先生の科学論を振り返ってみたい。

1. 生活の論理と空間の論理

玉置先生とは多くの共同研究や議論をしながら、連名による学術論文を一つも残せなかった。社会的背景の認識および研究目的の設定に関して基本的に一致し、具体的な調査方法や調査内容の設定まで一致しながら、調査結果の分析方法が全く異なっていたからである（と理解している）。例えば、現実の社会現象の中で「A」という事実と「B」という事実に注目して、両者の関係を明らかにすることの科学的な重要性という問題意識までは一致しながら、両者の関係について、玉置先生が「AからBをみる」のに対して小生は「BからAをみる」という細かな手法的違いを何度も経験していた。この違いが何であるかについて小生は長年思い悩むことになったのであるが、近年になってようやく、小生の主要な関心が「空間との対応関係からみた人間の生活の発展法則の解明（生活の論理の解明）」という点にあるのに対して、玉置先生の主要な関心は「空間の論理（空間そのものの発展法則）の解明」という点にあるのではないかと理解し始めていた。

しかも、この両者は科学として総合されなければならないのであるが、残念ながら現在の大学や学会の実情（極度に専門分化された中での論文量産体制）では極めて困難なことも理解していた。その意味で、部長退任後の玉置先生が学術論文とは別に執筆を予定されていた多くの著書に密かな期待を抱いていた（工学部長就任前には「本を4、5冊書きたい」と言っておられたが、2期目には「7、8冊」となり、死後発見したノートには11冊の執筆予定リストが直筆で残されている）。今となって、未完に終わった執筆原稿メモらしきものを拝見すると、そこには明らかに学術論文の世界とは違った「生活の論理」への玉置流考察が見られるのであり、それらの著書が完成すれば、両者の論理が総合された玉置先生の科学論（玉置流の「対立の統一」の様式）の全貌が明らかになるはずであった。悔やまれてならない。

2. アーキテクトとプランナー

福井大学赴任前の玉置先生は日本住宅公団の若手技師であった。大都市近郊におけるニュータウン開発が公団の主要テーマであった当時から、既に先生は市街地再開発事業に取り組み、現在では当たり前ともなった「まちづくり」の実践を先駆的に試みていた。まだ大学院生であった小生にとって、そのような玉置先生は研究者である前に「プランナー（計画者）」であり、西欧的「アーキテクト（建築

家）」の職能すら未成熟なわが国において、空間を創る新たな専門家としての職能像を間近に見つけられたのである。当時の酒の席での記憶として、「いくつかの自治体からプランナーとしての招請が来ており、それに応じるかどうか考えている」という話を直接伺ったことがある。横浜市の都市プランナーとしての田村明氏の存在はあまりにも有名であるが、それに匹敵する都市プランナー・玉置伸悟氏が日本のどこかで存在していたかもしれないのである。

福井大学における玉置先生の教育方針は、「アーキテクト」よりも「プランナー」の養成に向けられていたことは間違いない。現に玉置研究室の多くの卒業生が、建築設計事務所や建設業・住宅産業よりも自治体あるいは民間の都市計画技術者として活躍している。また、県内外における多くの自治体計画策定委員会等への先生の関与は、「計画策定」そのことよりもむしろ、その過程をとおして多くの都市計画技術者が真の「プランナー」として成長発達することを目標とした教育的意図によるものだと小生は理解している。

そして、このような「プランナー」のあり方をめぐっても、先生とは酒の席で多くを議論してきた。つい最近も「先生が描くプランナー像には、先生がアーキテクトの限界として指摘するものと全く同じ性質の限界が存在するのではないか？」という疑問を思い切ってぶつけてみた。先生は「そう言われたのは初めてだ。そうかなー。またゆっくり議論しよう」と約束されたのであるが、それも叶わぬことになってしまった。これも悔やまれてならない。

3. 強烈な生き様

玉置先生との思い出は尽きるところがないし、そのいずれもが強烈である。公団時代には、朝まで酒を飲んでわれわれ大学人が「家に帰って寝る」というと「俺は今から公団で仕事だ」といったメチャクチャな生活もしばしばであった。学部長時代には、その激務にもかかわらず毎日の「朝ゼミ（英文輪読）」を欠かしたことはなく、さらに加えて、深夜には自ら論文執筆のための作業を繰り返されていた。ときたま「そんな仕事は院生に任せたらどうですか」と進言すると「これは自分の趣味だから誰にもとられたくない」といった具合であった。このような強烈な科学者としての生き様（しかも深い人間愛に満ち溢れた生き様）に身近で触れ合えたことに感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。

（2001年12月24日）

第3回常任幹事会議事録(抄) 2001年12月4日(火)

1. 報告

全国常任幹事会(2/1~12/2, 高木)

省略: 北陸地区会議参照

福井空港拡張の中止を求める会臨時総会(小幡谷)

支部から3名出席。活発な意見交換があった。

「凍結=事実上の中止」と判断して、裁判闘争以外の会の活動は休止。

2. 第31期福井支部の活動について

(1) 月例会の計画 12月例会 大川洋子氏 12/11

「妊娠・出産に纏わる先人たちの知恵」

(2) 支部30周年記念行事企画について

1) 30周年記念m懇談会(小幡谷)

2) 市民講演会・シンポジウム(支部ニュース6号参照)

3) 「福井の科学者」88号を30周年記念特集

(3) 『福井の科学者』編集方針・発行方針について

「福井の科学者87号」2月に発行を計画

(8) 財政12月会誌配付時に、滞納者には、納入状況を連絡。幹事に、納入状況を連絡する。

3. その他: 支部ニュース(第6号)の発行。引き続き第7号を準備中。支部ニュースへの原稿投稿依頼中。

第2回北陸地区会議 議事録(抄)

2001.12.22 at 金沢, 全国常幹, 各支部事務局長(3名)

1. 12/1~12/2 全国常任幹事会報告

(1) 事務局報告 財政状況, テロ問題事務局長談話。

(2) 情勢討議 国立大独法化を巡って。

テロ・自衛隊派兵について(安斎代表幹事講演)。

(3) 前半期活動総括と後半期活動の具体化について

独法化問題: 独法化が議論されず統合問題だけに議論

が集中する傾向がある。私学との共闘も必要。

(4) 社会的活動, 国際部活動, 出版活動, など

(5) 会員拡大・組織活動: 院生若手の拡大と活動強化。

島根支部の状況について。九州シンポ: 有明海をテーマに250名が参加。改革や再編論議が盛んだが方針がない。

(6) 研究活動: 14 総学の準備(北海道支部担当)

(7) 研究基金: 申請を3件承認: 予算は13万円, 福井支部も採択された。基金の運用法について意見があった。

2. 支部報告(福井支部は省略)

富山: ニュースの発行 No.7 まで。会員の論説寄稿を毎回掲載。12/22 第1回例会・忘年会: 行政の公共性と費用負担の論理 - ゴミ処理手数料をめぐる法律問題 -

石川: ニュースを2号発行。10/19 金沢大学の「改革」について情報・意見交換会。11/5 の11月例会「アメリカ同時多発テロとアフガン攻撃」。

3. 北陸地区活動について

北陸シンポジウム: 富山担当。

テーマは「日本海の自然をまもる」。2002年5月に実施予定。基調講演: 田崎和江氏, 富山は重油流出事故と黒部川ダムに関わる報告を準備。

4. 意見交換

・富山支部で担当する北陸シンポは、テーマ的にも日本海シンポと重なるので、検討する。

・金沢大では、ガン研と大学院助手とに任期導入を決定。また、7学部を、医系, 自然系, 社会科学系の3つにする再編計画が持ち出されている。

・教員養成系の統廃合問題について、関係各大学とも総合化に手を挙げている。

30周年記念懇談会 福井支部の30年を語る が盛会でした

昨年12月21日(金)に記念懇談会が開催され、多数の創設期の会員をはじめ当日参加を含めて24人の会員が参加しました。小幡谷洋一氏の司会で、早々に乾杯を済ませ懇談会が始まりました。城谷豊氏の基調講演では、創設期の大学の状況、原発反対運動での地域に入った支部の活動状況など、今の支部の状況からは想像もできない多様な活動の紹介がありました。夜遅くまで懇談が続けられましたが、名残りを惜しんで22:00ころ散会しました。この様子は6月発行予定の「福井の科学者」88号(支部結成30周年記念特集号)で、報告する予定です。

独り言のコラム

携帯の文化?

わが家の携帯電話普及率が6割になった。5人家族で持っていないのは、筆者と中学生の子どもである。たしかに、街なかでは公衆電話が減ってしまったし、一緒にいる友人にいつも「携帯」を借りるというのも気が引ける。授業中に外国語の授業の準備をしたりレポート作成をする「内職」は多くの諸氏も学生時代に経験があると思う。最近の大学では授業中に「内職」はおろか携帯で遊んでいる者が目につく。女子学生は比較的真面目で講義ノートも良く取っていたが、いまでは携帯をいじりまわしている女子学生が非常勤先の大学でも増えてきた。

5年あまり前から、講義中にもかかわらず教室から携帯を持って出て行ってしまふ学生たちが増えてきた。3年前に次の様な経験をした。少人数教育と称して1年生対象に行っている10人あまりのセミナー形式の授業がある。ある日、筆者のすぐ隣に座っていた学生が突然携帯を取り出し着信を確かめるとスッと出て行ってしまった。しばらくして戻って来ると黙って悪びれずに着席するから、席を外した理由を問うと、緊急の電話だった、というので、更に問うと、アパートの電話か何かの工事の日程打ち合わせだったようだ。筆者は学生たちに、毎年、授業中に教室から出るな、出たら戻るな、と警告をしているが、それでもほとんど効果がないから警告ではなく強制力が必要かもしれない。一度出たら入れないようなドアにしたらどうか、と思ってしまう。

先日、この大学のある委員会に参加した。どこかで携帯の呼び出し音が聞こえて、向いに座っていた委員の若い先生が携帯を取り出して確認した後、携帯を持って会議室から出て行ってしまった。しばらくすると戻ってきて何事もないようすで着席した。どうでもよい会議だったとは思いますが、しかし、その先生の行動は私には理解できない。会議に出席しても参加していないのだ。文化が違うような気がする。これまでの文化が良いとはいわないが、「携帯」の文化はこれまでの文化を問答無用に壊している、そういう気がするの、筆者だけだろうか。

DoCoMo はどのような文化を作ろうとしているのだろうか。

(2001/12/8 OG)

会員の声

大学教員とパラダイムシフト

小寺 忠

玉置先生は、その遺稿「生徒とともに」の巻頭言で、大学教員の意識改革を訴えておられる。時の流れ、時代のうねりの中で、旧態依然とした「教えてやっているのだ、付いて来られない者は退学させればよい」という意識に警鐘を鳴らしておられる。確かに、「何をしに来ているのだ」と思いたくなる学生もいなくはないが、登校してきている学生は大抵、根はすばらしいと思う。玉置先生が指摘されているように、福井大学の学生は、同世代の上位1割程度に入っていると思われる。もっともっと胸を張り、自信を持ってよいはずなのに・・・なぜそうになっていないのか。一つには、大学教員が学力の低下に対応できず、昔ながらの内容を昔ながらの方法で教え、昔ながらの方法で評価しているためではないか。理解させるということを念頭に置かず、理解できなければ理解できない者が悪いという態度をとり続けているからではないか。自分の頭で考えさせる訓練をしていない来ていない学生に、突然考えることを要求しても、無理というものだ。考えるとはどういうことか、から指導していかねばならないのに、それを理解できていない教員が多いようだ。いま話題のJABEE（日本技術者教育認定制度）は、自らの頭で考える学生を養成しようとしているが、その前に教員自らが、教育の在り方を自らの頭で考えることも要求している。それがJABEEの言うパラダイムシフトの一つである。これがうまくいかなければ大学教育に未来はないと言っても過言ではない。

寄稿

住んでみて感じたアメリカという国

その2 - 大学 -

永井 二郎

前回に引き続き、アメリカに住んでみて強く印象に残ったことを述べます。

約10ヶ月間、私はカリフォルニア大学のバークレー校にて研究生活を送っておりました。分野は機械工学です。各種評価機関による大学ランキング2001年によれば、工学部の評価は全米で第3位、機械工学についても全米第3位であり、教員・施設・プログラム・学生の質の高さは大変なものでありました。以下に、（特に目新しい事では無いのですが）私がびっくり感激したことをいくつか報告したいと思います。

バークレー市は人口のかなりの割合が大学関係者（教職員と学生）です。つまり、大学を中心に町が動いており、大学抜きにして市の政治経済を語ることはできません。ちなみに市の人口10万人に対し、大学の教職員と学生を合わせると3万数千人となっています。一方、私が所属する福井大学はどうでしょうか。当時住んでいた家の大家さんが福井市の人口を私に質問した後で、「なるほど。大学を維持・運営していくにはちょうど良い規模の市ですね。」と私に確認してきました。アメリカでは州や市が大学を運営しており、日本も同じ事情なのだろうと思いきや、私が「残念ながら、福井市と福井大学の結びつきはあまりありません。福井市民も福井大学にあまり関心が無いようです。なぜなら福井大学は国立大学だからです。」と答えると、「???」という顔をしていました。バークレー市民は、有料の大学の公開講座に参加しており、キャンパスのことにも詳しいようでした。福井大学も、さらに「地域社会に貢献する大学」となるように地道な努力が必要であると感じます。

もう一つ、お金の話をします。2000年のバークレー校の決算書を見ると、収入の35%が州政府からの補助金、授業料収入が18%で、後は外部獲得資金でした。外部獲得資金の内訳は、州政府や連邦政府の競争的補助金（日本で言えば、科研費その他）と、大学関連商品の売上金と、一般からの寄付金となっています。バークレー校の前学長が、私の研究分野の方だったので色々と苦労話を伺ったのですが、学長の最も大切な仕事は寄付金集めである、と断言されていました。全米あちこちを駆け回り、様々な集会に出向き、バークレー校の現状と将来展望を説いて回って寄付金を集めるのだそうです。資料を見て驚いたのですが、バークレー校が集める一般からの寄付金総額は、なんと年間250億円になるそうです。これがあるからこそ、大学の設備も充実させることができ、多くのスタッフを雇うことができるわけです。この寄付金は、決して企業からの委任経理金ではなく、あくまでも個人からのお金（一人平均30万円）です。アメリカ国民の大学に対する考え方が良く表れた数字であると思います。大学（すなわち研究と教育）に寄付をすることが、国の将来ひいては自分の利益となっていくかは還元されてくるだろう、という信念が感じられます。